

ま え が き

平成16年度におこなわれた本校の研究の中から、このたび6名の個人研究と各学年の総合学習の取り組みの6本の計12本を研究紀要第34集としてまとめましたので、ここにご報告いたします。

今回ご報告する研究のうち、個人研究は、「話すこと・聞くこと」に重点が置かれている国語教育に、「読むこと」についての重要性を説く国語科の実践、思考力と判断力の育成と評価に関する社会科の実践、生徒の選書の幅を広げ、新しい読書の楽しみの発見につながる国語科の実践、気象教育の重要性を説く理科の実践、創作ダンスにおける教師が学習者に対しての指導意図の重要性を説く保健体育科の実践、学校生活における児童・生徒のメンタルヘルス支援について説く保健体育科の実践の6本になっています。

総合学習に関しては、本校で取り組んだ実践報告としてまとめた6本となります。

私自身は教育学を専攻していますので、このたびの研究紀要の論文や報告には感慨深いものがあります。現在、私の研究室ではドナルド・A・ショーンの *The Reflective Practitioner*. 1982（部分訳としては、佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵』ゆみる出版）を読み合っています。教師は医師や弁護士などの専門職と比較すると準専門職といわれているので、より高度な専門知識を身につけなければ、あるいは、教育学は医学や法律学と比べると学問体系として遅れているので、基礎科学→応用科学→実践という流をきちんともった学問にならなければという思いをもつ教育関係者が大勢おられます。しかし私自身は、教師は授業の中で実践知や経験知を積み上げながら指導法を考えているし、この積み重ねの上に教育学があるのではと考えています。ショーンは、現場での「直観」的なわざ（art）を大事にし、その省察（反省）を重ねることから、これまでの「技術的合理性」とは異なる土台をもった新しい学問が始まるという主張を述べており、この点で、私自身の関心にぴったりあてはまっています。

今回の紀要でも、理論を実践にあてはめるというのではなく、実践から理論が創り出されている様子を見てとることができ、とても嬉しく思います。皆さま方の率直なご批判とご指導をいただき、今後の研究のいっそうの充実を図りたいと願っております。

平成17年8月

お茶の水女子大学附属中学校校長
三 輪 建 二